

研究奨励交付金（若手奨励研究） 報 告 書

令和4年度採択分
令和5年5月29日作成

研究課題名（和文） 生徒の認知機能，および社会情緒的コンピテンスと学習意欲の関連

研究課題名（英文） The Relationship between students' cognitive function, social-emotional competence, and motivation to learn.

研究代表者

氏 名 小林 亮太
福岡県立大学 人間社会学部・講師

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
小林亮太	人間社会学部・講師	研究計画・調査実施・解析・執筆

研究奨励交付金（配分額）

198,000円

研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

生徒の学習への意欲を高めたり，維持したりするにはどうしたらよいのだろうか？本研究ではこの疑問について，注意や反応を制御する能力であるエフォートフルコントロールと自身や他者の感情の理解，および他者との良好な関係の構築に関わる能力である社会情緒的コンピテンスに焦点を当て，検討を行った。中学生と高校生に対して質問紙調査を実施し，237名分のデータについて解析を行った。その結果，特に社会情緒的コンピテンスにおける他者との関係性を構築・維持する能力，および選択の結果を理解した上で適切に意思決定を行う能力が生徒の学習意欲を促進する可能性が示唆された。また，エフォートフルコントロールにおける嫌だと思うような行動にも着手したり，物事に集中したりする能力が上述の社会情緒的コンピテンスを支えると同時に，学習意欲の促進にも関わることが示された。

研究分野／キーワード

エフォートフルコントロール，社会情緒的コンピテンス，学習意欲

1. 研究開始当初の背景

学習への意欲や動機づけは生徒の学習行動やその成果を考える上で重要な要因の1つである (Richardson et al., 2012)。たとえば, Credé & Kuncel (2008) では学習意欲が高いほど, GPA (Grade Point Average) が高いことが報告されている。また, 学習への意欲, およびその結果としての学習成果は, 学校適応や精神的健康にも関わっている (Chemers et al., 2001)。しかし, こうした学習意欲の重要性とは逆に, 生徒は勉強で最も悩んでいることとして「やる気が起きない」ことを挙げているという報告もなされている (ベネッセ教育総合研究所, 2015)。このように生徒において学習意欲は重要であるものの, 生徒本人にとって, 学習意欲を良好に保つことは決して容易なことではない。そのため, 学習意欲の促進や低減に関わる要因を検討することが必要となる。

では, 生徒の学習への意欲や動機づけを高めるためにはどうしたら良いのだろうか? 学習意欲の促進要因としては, まず, エフォートフルコントロール (Effortful Control: EC) が考えられる。ECとは, 「実行注意の効率を表す概念で, 顕現して継続中の反応を抑制し, 非顕在的な反応を開始したり, 計画を立てたり, 誤りを検出したりするための能力」と定義されている (Evans, & Rothbart, 2007; Valiente et al., 2004; 山形他, 2005)。ECには, 行動始発の制御, 注意の制御, 行動抑制の制御の3つの因子が想定されている。行動始発の制御は, 避けたいと思うような行動を意識的に遂行する能力である。注意の制御は, 必要に応じて注意を特定の対象に集中させたり, 移行したりする能力を意味する。行動抑制の制御は, 不適切な行動を抑制する能力とされている。こうしたECの各側面は生徒が学習をする際に重要な能力と考えられる。たとえば, 特定の課題に取り組む際には, その課題への集中的注意を持続させることができれば, 課題成績などは向上するだろう。そして, 上手く課題ができたり, 学習に取り組めるという自信や効力感が学習を始めたり, 継続することに関わることを踏まえれば (Bandura, 1977), ECは学習意欲を促進すると推察される。

また, 社会情緒的コンピテンスも学習意欲に関わると考えられる。社会情緒的コンピテンスとは, 「自分と他者・集団との関係に関する社会的適応, 及び心身の健康・成長につながる行動や態度, そしてまた, それらを可能ならしめる心理的特質」のことである (遠藤, 2017)。社会情緒的コンピテンスについては様々な捉え方, 区分がなされている。たとえば, Social and Emotional Learning of 8 abilities at School (SEL8S) という社会情緒的コンピテンスの学習プログラムにおいて, そのコンピテンスは, 基礎的社会的能力と応用的社会的能力に大別される。そしてさらに, 基礎的社会的能力は自己への気づき, 他者への気づき, 自己のコントロール, 対人関係, 責任ある意思決定の5つに下位区分されている (小泉, 2011)。自己への気づきとは自分の感情や能力について適切に認識, 評価する能力であり, 他者への気づきとは他者の感情を理解するとともに, 他者の立場になって考える力である。自己のコントロールは, 目標を達成するために自身の情動や行動を適切に調整する能力を意味する。対人関係については, 他者との関係性の中で生じる情動に適切に対処し, 良好な関係を構築, 維持する能力である。責任ある意思決定は様々な選択肢を選ぶことで予想される結果を考慮し, 適切な意思決定を行う能力を指す。何かを学んだり, 課題に取り組むことに自身の興味や不安といった様々な感情が関わることを踏まえると, 特に自己への気づきや自己のコントロールといった社会情緒的コンピテンスの側面は学習意欲を高めると推察される。

2. 研究の目的

本研究では, 生徒を対象に調査を実施し, ECと社会情緒的コンピテンス, および学習意欲の関係性について探索的に検討することを目的とする。ECが気質的側面に焦点を当てている概念であるのに対して, 社会情緒的コンピテンスは能力ではあるものの発達や学習によって獲得されうる点が強調される概念である。この点を踏まえると, ECが社会情緒的コンピテンスの促進に関わり, その結果として学習意欲が良好になるという関係性が想定される。

3. 研究の方法

(3-1) 参加者と手続き クロスマーケティング社に依頼し、中学生、および高校生合計300名にオンライン上で質問紙調査を実施した。調査では、学年と性別がある程度一定となるように募集を行った。Satisficeを検出するための項目 (i. e., この質問については必ず「1:まったくあてはまらない」を選択してください: 三浦・小林, 2015) に不適切に回答した者63名を解析から除外した。そのため、最終的な解析対象は237名 (男性116名, 女性121名, 平均年齢15.278歳 ($SD=1.758$)) であった。

(3-2) 測定尺度 ECについては、日本語版Early Adolescent Temperament Questionnaire-Revised (EATQ-R) のEC下位尺度を用いて測定を行った (中川他, 2020)。社会情緒的コンピテンスについては、中学生用社会性と情動の学習8つの能力尺度II (SEL-8JHS) の基礎的社会的能力を測定する5つの下位尺度を用いて測定を行った (小泉・米山, 2020)。学習意欲については学習習慣尺度の日常的学習習慣下位尺度を用いた (當山・嘉数, 1998)。

(3-3) 統計解析 記述統計値についてはHAD18.000を用いて算出した (清水, 2016)。構造方程式モデリング (SEM: structural equation modeling) については、Amos26.0を用いて実施した。

4. 研究の主な成果

始めに、各変数の記述統計値と相関係数をTable 1とTable 2に示した。そして、ECと社会情緒的コンピテンス、および学習意欲の関係性について検討を行うため、SEMを実施した (Figure 1)。その結果、ECの下位尺度である行動始発の制御と注意の制御から社会情緒的コンピテンスの対人関係 ($\beta s > .251, ps < .002$), および責任ある意思決定 ($\beta s > .206, ps < .018$) への正のパスが認められた。そして、対人関係と責任ある意思決定から学習意欲へのパスも有意であった ($\beta s > .216, ps < .001$)。こうした結果から、ECが社会情緒的コンピテンスのうち特に良好な対人関係の構築や適切な意思決定に関わる能力を促進することで、学習意欲が高くなる可能性が示唆された。生徒においては、良好な対人関係を有することが、良い学習環境や学習を始めるきっかけに繋がりやすいのかもしれない。責任ある意思決定と学習意欲の関連については、普段から自身の選択肢に伴う結果のよし悪しを考慮できている者は、学習することの重要性を理解できていたために、学習意欲が高かった可能性も考えられる。こうした社会情緒的コンピテンスについては、多様な学習プログラムが提案されており (e. g., 小泉, 2011), そうした手法を使い社会情緒的コンピテンスを高めることで、生徒の学習意欲の向上を図ることができるかもしれない。この可能性については今後検討していく必要がある。

また、重要な点として、行動始発の制御と注意の制御から学習意欲へのパスは社会情緒的コンピテンスを考慮した上でも有意であった ($\beta s > .158, ps < .040$)。学習内容やその時々気分や状況によっては学習を避けたいと思うこともある。そうしたときに、避けたいと思うような行動でも実行したり、集中したりすることに関わるECの側面である行動始発の制御と注意の制御が高い生徒は、そうでない者と比べて、学習への取り組みや継続がなされやすいのかもしれない。そのため、生徒の学習意欲の向上を検討する際には、そうした認知機能の個人差にも焦点を当てる必要があるだろう。

本研究では、日常的な学習習慣を尋ねることで、学習意欲の測定を試みている。そのため、学習意欲に関する実際の行動という相対的に客観的な指標に基づいて、学習意欲に関わる要因を検討できたと考えられる。そうした利点の一方で、本研究では学習意欲の下位区分を測定できていないことが挙げられる。先行研究では学習意欲の下位区分によって学業関連ストレスの程度との相関係数や方向性が異なることが報告されている (e. g., 西村・櫻井, 2013)。そのため、今後は学習意欲の下位区分にも焦点を当てる必要があると考えられる。

Table 1
測定尺度の記述統計値

	平均値	標準偏差	α 係数
1) 行動始発の制御	2.817	0.985	.711
2) 注意の制御	3.249	0.905	.656
3) 行動抑制の制御	3.373	0.918	.645
4) 自己への気づき	2.959	0.681	.803
5) 他者への気づき	3.018	0.686	.847
6) 自己のコントロール	2.669	0.755	.696
7) 対人関係	2.641	0.706	.763
8) 責任ある意思決定	2.783	0.679	.746
9) 学習意欲	3.363	0.916	.849

1)-3)はエフォートフルコントロールの下位尺度であり,
4)-8)は社会情緒的コンピテンスの下位尺度である。

Table 2
各変数間の相関係数

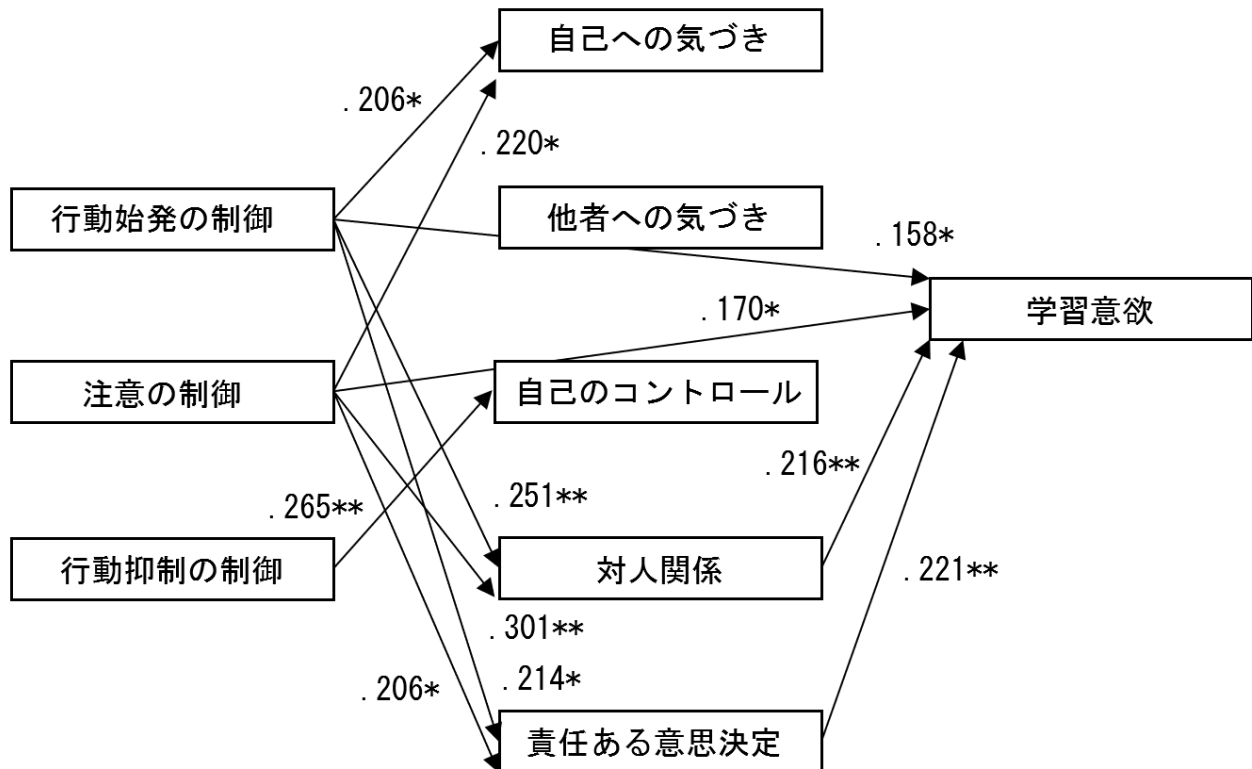
	1	2	3	4	5	6	7	8
1) 行動始発の制御	—							
2) 注意の制御	.688 **	—						
3) 行動抑制の制御	.510 **	.547 **	—					
4) 自己への気づき	.333 **	.336 **	.178 **	—				
5) 他者への気づき	.252 **	.249 **	.143 *	.539 **	—			
6) 自己のコントロール	.256 **	.195 **	.314 **	.314 **	.211 **	—		
7) 対人関係	.389 **	.400 **	.158 *	.481 **	.469 **	.355 **	—	
8) 責任ある意思決定	.353 **	.350 **	.215 **	.565 **	.561 **	.419 **	.485 **	—
9) 学習意欲	.475 **	.478 **	.303 **	.428 **	.360 **	.320 **	.499 **	.500 **

** $p < .01$, * $p < .05$

1)-3)はエフォートフルコントロールの下位尺度であり, 4)-8)は社会情緒的コンピテンスの下位尺度である。

Figure 1

ECと社会情緒的コンピテンス、および学習意欲の関連



Note: ** $p < .01$, * $p < .05$.

解析したモデルでは、エフォートフルコントロールの各変数から社会情緒的コンピテンスの各変数、およびそれらから学習意欲へのパスを全て設定していたものの、非有意であったパスについては見やすさのためにFigureでは省略している。また、エフォートフルコントロールの各変数間、および社会情緒的コンピテンスの各変数の誤差項間に共分散を設定していたが、こちらも省略している。

5. 主な発表論文等

なし

6. その他の研究費の獲得

なし

7. 引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84(2), 191-215. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.84.2.191>
- ベネッセ教育総合研究所 (2015). 現役の中高生に聞きました！ 普段の勉強での悩みは？ Retrieved from <https://benesse.jp/kyouiku/201508/20150830-6.html> (2023. 5. 29)
- Chemers, M. M., Hu, L.-t., & Garcia, B. F. (2001). Academic self-efficacy and first year college student performance and adjustment. *Journal of Educational Psychology*, 93(1), 55-64. <https://doi.org/10.1037/0022-0663.93.1.55>

- Credé, M., & Kuncel, N. R. (2008). Study Habits, Skills, and Attitudes: The Third Pillar Supporting Collegiate Academic Performance. *Perspectives on Psychological Science*, 3(6), 425-453. <https://doi.org/10.1111/j.1745-6924.2008.00089.x>
- 遠藤 利彦 (2017). 「非認知」なるものの発達と教育 その可能性と陥穽を探る 遠藤 利彦 (編) 平成27年度国立教育政策研究所プロジェクト研究報告書 非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書 (pp. 15-27).
- Evans, D. E., & Rothbart, M. K. (2007). Developing a model for adult temperament. *Journal of Research in Personality*, 41(4), 868-888. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2006.11.002>
- 小泉 令三 (2011). 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 小泉 令三・米山 祥平 (2020). 中学生用社会性と情動の学習8つの能力尺度Ⅱ (SEL-8JHS尺度Ⅱ) の作成 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 6, 1-10.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究 社会心理学研究, 37, 1-12. https://doi.org/10.14966/jssp.31.1_1
- 中川 敦子・鋤柄 増根・松木 太郎・古田 美佳 (2020). 前青年期における気質測定尺度 (Early Adolescent Temperament Questionnaire-Revised) の, 親子評定間の比較を含む基礎研究 小児保健研究, 79(6), 545-553.
- 西村 多久磨・櫻井 茂男 (2013). 中学生における自律的学習動機づけと学業適応との関連 心理学研究, 84(4), 365-375. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.84.365>
- Richardson, M., Abraham, C., & Bond, R. (2012). Psychological correlates of university students' academic performance: A systematic review and meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 138(2), 353-387. <https://doi.org/10.1037/a0026838>
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 當山 りえ・嘉数 朝子 (1998). 高校生の学習統制感, 原因帰属および学習習慣の発達の研究 琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 109-118.
- Valiente, C., Eisenberg, N., Smith, C. L., Reiser, M., Fabes, R. A., Losoya, S., Guthrie, K., & Murphy, B. C. (2003). The relations of effortful control and reactive control to children's externalizing problems: A longitudinal assessment. *Journal of personality*, 71(6), 1171-1196. <https://doi.org/10.1111/1467-6494.7106011>
- 山形 伸二・高橋 雄介・繁榎 算男・大野 裕・木島 伸彦 (2005). 成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 14(1), 30-41.